

第34回泌尿器科漢方研究会学術集会

会長： 笥善行(香川大学医学部泌尿器科学教室)

会期： 2017/6/17 ~

会場： コクヨホール(東京都)

一般講演Ⅱ

座長： 信州大学 石塚 修

5. 長期間続く症状に対して漢方薬による
アプローチで治療可能であった2症例名古屋第一赤十字病院 泌尿器科
佐野 友康

【症例1】43歳女性で肥満体型。過活動膀胱にて紹介ありH28年12月初診。H27年より頻尿・切迫感といった症状を認め、近医で抗コリン薬処方をして一時的には改善するもすぐに症状の増悪(4月よりトピエース→ベシケア→ベタニスへといずれも最大用量で交替療法を行うも、尿意切迫感は1週間ほどで再燃するのを繰り返していた。既往歴に強迫性障害(特に手洗い強迫)があり、精神科薬を多数内服していた。両側下腿に著大な浮腫、舌に歯痕を認めた。抗コリン薬は内服継続されるため、まず五苓散7.5g/日と合わせて行った。排尿日誌では一回量50-200ml 昼8-12回、夜3-4回であった。その後も尿回数増加など症状の一時的悪化を認めるも、浮腫の改善は乏しく、アルダクトンA25mgを夕食後に追加した。2か月程度続けたが改善に乏しく、下腿浮腫も認めるが、膝周囲も浮腫状で、全身診察では脂肪太りというよりも水太りのような印象であったため、防己黄耆湯7.5g/日へ変方した。その後、内服1か月で体重変化はないが、以前のような尿意切迫感は消失し、さらに1か月追加し、抗コリン剤は1日おき内服へしてみたが悪化を認めず、防己黄耆湯のみの継続で現在も継続中である。なお、膝周囲の浮腫は軽減したため、膝痛が改善した。

【症例2】23歳女性。H28年6月下旬近医で膀胱炎の診断あり、抗生剤の内服を行ったが、その後発熱と背部痛が持続するため紹介となった。腎盂腎炎として2週間抗生剤内服による通院治療を行い、採血検査上で感染は治まっているが、その後も微熱の持続(37-38度の間)と背部痛の増悪を認めた。舌にやや水毒も認め、五苓散7.5g/日も合わせて処方した。